
ただの、後輩。

宮古架小利

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ただの、後輩。

【Nコード】

N9394B

【作者名】

宮古架小利

【あらすじ】

部活内で意気投合した先輩。ほんのちょっとした会話の中で少女の感じたところ。

イマドキの高校生、なんだけど。

部活の先輩後輩内では凄く盛り上がってる恋バナを、外から眺める。

昔から恋愛事にはうとかった方、誰かと付き合ったことなんてない私には、カレカノ有の皆の話についていけなかった。

時々質問は回ってくる。

「夕胡^{ゆこ}は？彼氏いないの？」

「えええっ、いませんよっ」

「えー、もったいないなあ。じゃあ、亜衣ちゃんは？」

「私は…、遠距離の彼が…」

「おぉー！」

——で。

いつの間にか傍観者。

最近はまだ諦めて、今日の大会の休み時間も輪から一步離れた所で耳を傾けてた。

そう。

いつもと、同じ。

「ちょっと避難ー」

「え？」

驚く私の目線の先には、三年の男子の先輩が座っていた。

うちの部活の男子は一年と三年の二人だけしかない。

その内の一人の、私の唯一の男子の先輩が、原中卓也先輩だった。

「田坂君が捕まっちゃってさ」

もう一人の男子を探すと、さっきまで恋バナをしてた10人位の女子に囲まれてた。

何だか順応してる。田坂君も彼女持ちみたい。

「俺、昔からああいうのついていけなくてさ。なのによく彼女持ち疑惑かけられちゃうから、逃げてきた」

「えへへ。私もです」

仲間を見つけた気分で、ちょっと嬉しい。

「なんなのかな、昔から女の子と話すことほとんどなかったからなあ」

「私も。皆さん青春してるなー、て、見えました」

「あはは、俺らジジくさいのかもねえ」

「ええー！？でもそうかも…」

「いや、やっぱり洗脳されちゃいけないと思う！俺ら位がちょうどいいんだよ！…と思いたい」

「そ、そうですよねえ」

他愛ない会話。

30分位ずっと二人で話してた。

恋愛の事。

テストの事。

好きな漫画の事。

今度本を貸してくれる事。

30分なんて、すぐだった。

しばらくすると、「もうそろそろ結果発表だよ！」と部長が叫び、皆少しづつ動き出した。

「はあー」

「なあに？」

「その、やっぱり高校生なんだから彼氏位いなきや変なのかな、と…」

「ええ？んー、別にいいと思うよ？」

私は先輩を振り仰ぐ。

「そういうのって自然に見つけられるものだと思うし、焦ることないよ」

「でもやっぱり、話についていけないからなあ」

「大丈夫、俺もいるじゃん。今のまま変わらないでいてよ？」

「でもでも、先輩引退したら私、一人じゃないですか…」

「心配せんでいいって。俺引退してもちよくちよく遊びにくるし、そんな時は」

先輩が、にこ、と笑う。

「守るから」

別に、特別な感情なんてないって、知ってる。

先輩は誰にだってこれでもかって位優しいし、私を妹みたいな感覚で扱ってるのも重々分かってる。

分かった、はず。

私に向けて発せられた言葉は、私の胸に大きくて深すぎる傷を遺した。

その傷は、じわじわ私を苦しめる。

痛くて。

辛くて。

どうせ「妹」なら、

「他人」の方が、良かった。

まだまだ、彼氏は未定。

先輩と、そのままって約束したんだから。

遊びに、来て、くださいね？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9394b/>

ただの、後輩。

2010年10月9日13時03分発行